

# 現代・未来の価値観から観る東北の布の調査

## — 中間報告 II

Research of Tohoku Region's Fabrics in the View of the Values for the future and Today  
— Interim Report vol.2

大 高 亨  
OHTAKA Tohru

### 1. はじめに

2013年度から四ヶ年計画で東北の布の調査を実施しており、この論文は調査二年目の報告である。

昨年の夏に調査した「刺し子や裂き織り」などは布を再生したエコロジーの精神がかたちになったものである。合理性を追求してきた現代社会が忘れていた「資源を大切に使う」ことの意味が、ここ東北の地では今なお生き続けている。

これらの優れた東北の布の調査、研究を通じ、物だけでなく東北の文化や精神を背景としたものづくりの現場から、エコ社会の手本ともなる「現在、未来におけるも価値ある布づくり」を伝統染織や布を通じて考察するものとした。

### 2. 調査について

東北の地は、非常に広大で険しい山河に囲まれており、厳しい環境のせいもあってか、今まであまり東北の染織品について調査、研究してきた研究者も少ないのが現状であろう。

この東北の布の調査を行うきっかけとなったのは、本学のプロジェクト「平成の百工比照集収作成事業<sup>1</sup>」の染織品の収集であった。2012年の夏約二週間で東北の主な染織産地を回ることであった。この収集の旅は、新しい発見の連続であり、東北秋田の地で生まれ育った私にとっても衝撃的な布との出会いであった。

このレポートは、東北の布の調査の二年目の中間報告であり、東北の北東部、気候もきびしく穀物の生育も厳しい岩手県、青森県の調査についての報告である。

この二県は特に東北の中でも、地理、気候環境ともに厳しい地である。このような厳しい環境であるからこそ生み出され、「エコの精神」に裏打ちされた染織、布が存在するのであろう。糸に出来る素材がなかなか栽培、入手できなかった冷酷な地域だからこそ生み出された様々な布であり、大切に使われてきた地域である。

この二県の中でもまだ訪ねていない工房、産地に関してはこの報告書では触れないこととする。訪ねてはいるが、私の判断で「過去、現在、未来における価値ある布づくり」からはずれるものについても触れないものとする。また、現在でも作られている布を基本に調査する。しかし、途切れたものであっても未来につながる、継承すべきと判断したものについては、独自の判断で取り上げることとする。

### 3. 各地の布の調査報告

#### 「津軽こぎん」青森

「津軽こぎん」とは、弘前周辺の地域を中心に刺されている「刺し子<sup>2</sup>」である。刺し子とは野良着などの補強、保温のために刺したものが始まりと言われ、全国の地域に見られる。特に模様刺しは東北と全国の日本海側に主に見られる。その刺し子の中

には「津軽こぎん」の他に「南部菱刺し」「庄内刺し子」があり、日本三大刺し子と呼ばれている。この日本三大刺し子はいずれも東北地方にあり、それぞれに違った特色がある。

津軽こぎんが刺されるようになった江戸時代は、まだ木綿が東北北部には普及しておらず、津軽藩の農民達は木綿を身につける事が禁じられ、次第に補強や保温の為に、当時の麻の着物に同じ麻の糸で刺し子が施されるようになり、津軽こぎんへと発展してきた。

明治の初めごろまでは、女の子は五、六歳になると針を持ち、何枚もの刺し子の着物を持って嫁入りし、愛する夫の野良着にも、競い合うように様々な模様を刺し、美しい布を生み出した。津軽の女性にとってこぎん刺しは自己を表現する手段でもあった。

明治初期以前のこぎん刺しは津軽各地で刺され、縞模様の特色から黒石市・平川市周辺の東こぎん、西目屋村・旧相馬村周辺のものを西こぎん、旧金木町周辺のものを三縞こぎんと区別できる。

現在の津軽こぎんの特色は、藍染めの麻地に白い綿糸で、布地の緯糸に沿って経糸の本数を奇数目で一目、三目、五目と刺されているのが基本であり、強いコントラストの美しい幾何学模様が構成されている。

布地に綿を使ったり、色糸で刺すことも今は行われている。また、そろばん刺しという偶数で刺すもの、使って強度をアップするための二重刺しといったもの、染めこぎん（アバこぎん<sup>3</sup>）といったものも以前はあった。

津軽こぎんの調査は、2012年8月以来二回目の調査であり、弘前こぎん研究所を訪ねた後、青森県立郷土館で故田中忠三郎コレクションの国の重要有形民俗文化財指定の刺し子、青森市の故田中忠三郎稽古館コレクションの刺し子を取材させていただいた。その他、前田セツ研究会の展示販売店、故鎌田亮展氏のアトリエも訪ねた。今回の報告では、弘前こぎん研究所を中心として取り上げ、紹介する。また、田中忠三郎コレクションについては別の章で報告する。

弘前こぎん研究所は、昭和37年に前身の財団法人木村産業研究所より改名、改名以前はホームспан（毛織物）の指導を中心としていたが、当時失いかけていたこぎん刺しの調査に力を注ぎ、口伝によることと経験者に教わり試作をし、資料の集収と柄の整理を行ってきた。現在はこれらをもとに製品を生産している。

弘前こぎん研究所では、研究所で一番の刺し手である三浦佐和子さんと、研究所長の成田貞治さんを訪ね、工房見学と制作の手順などの説明をしていただいた。三浦さんには、「平成の百工比照」用に全部で48柄の刺し子見本を制作いただき、コレクションの中に入っている。

近年の民芸ブームもあり、都市部のクラフトショップなどで、こぎん刺しの小物がよく見られる。弘前周辺だけでなく全国各地で若手のこぎん刺し作家が制作をしている。すばらしいことである。



弘前こぎん研究所（前川国男設計）



津軽こぎん



刺し作業（裏）



前田セツこぎん研究所製品



製品：こぎん小袋

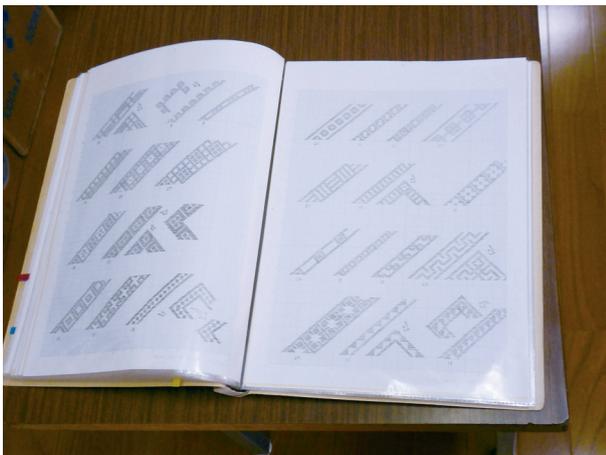
### 「南部菱刺し」青森

津軽地方のこぎん刺しに対して、旧南部藩の太平洋側の地域で刺されていた刺し子が「南部菱刺し」であり、浅葱色の麻布を表、裏に古手木綿を重ねて白と藍色の綿糸で刺されている。刺される模様は横長の菱形模様が主で、多くのバリエーションがあり、津軽こぎんと違い経糸の目を偶数でひろい、緯糸に沿って刺していくのが基本である。

着物の他、前だれ（前掛け）、たっつけ<sup>4</sup>などにも刺され、明治末頃東北本線の開通により、木綿や毛糸が流通し裏地に華やかな布地をあてたり、前だれに毛糸の色系を使用した。

菱刺しで訪ねた先は、天羽やよいさんと山田友子さんである。天羽さんは東京生まれで八戸市に来て菱刺しと出会ったそうである。現在は刺す織物も自身で織られている。天羽さんの菱刺しの特色は自身で染められる植物染めの美しい色のハーモニーでもある。

もう一方の山田友子さんは、天羽やよいさんのお弟子さんであり、有志とともに「南部菱刺研究会」を立ち上げ、現在工房「つづれや」店主のかたわら、各所で南部菱刺しの講師もされている。昨年の夏に伺った際は、「八戸ポータルミュージアムはっち<sup>5</sup>」にて研究会の発表展示会が開催されており、生活の中で使う様々な物に菱刺しが刺されていた。



こぎんパターン図ファイル



天羽やよい作 菱刺し帯



山田友子さんと筆者



菱刺し帯 デイテール



菱刺しエプロン



刺し子用 植物染糸



菱刺し教室キット

「南部裂織」青森

江戸時代東北地方では、暖かい綿はとても貴重であり、手に入るものは日本海側に北前船で運ばれてきた古手木綿であった。南部地方は太平洋側の為、これらの古手木綿もなかなか手に入らず、布は大切に使われ、端布も祖末にする事無く重ねて刺し子にし、最後は経糸に麻を張って緯糸にこの裂いた布を織り込んで、夜着、仕事着、帯、前掛けなどにしていた。

青森では裂織を「サグリ<sup>6</sup>」と呼んでいる。かつて裂織は日本海側の各地、京都府丹後地方、福井、三国地方などでも織られていて、各地での呼称は異なるが、貴重であった古手木綿を裂き、緯糸として再利用して織られた生活着は、とても重宝されていた。南部地方では、大正時代、昭和の戦前にかけて織り続けられた。この地方に残されている多くのサグリのこたつ掛けは、地機<sup>7</sup>による最後の実用生産品となっていた。昭和23年の大麻取締法により、麻織物が織れなくなると同時に、地機もなくなっていった。しかし、この時代に織られたサグリのこたつ掛けや帯などは、戦後も家庭で使われ、身近に残っており、これらのサグリが身近にあったことが、後の「南部裂織保存会」を設立した故菅野暎子さんの復興活動の素地となる。

今回はこの「南部裂織保存会」を訪ねた。故菅野暎子さんの設立したこの保存会は、1975年から現在まで運営され、2002年には十和田市の匠工房内に「南部裂織の里」を構え、多くの方が南部裂織を体験し、学べる場となっている。



工房（地機）



故菅野暎子作品（こたつ掛け）



南部裂織商品



南部裂織の里

### 「南部古代型染」岩手

室町時代に始まった型染は、武将の旗指物や馬印、張幕などに紋章を染め出すことから始まったといわれる。

こうした中、「蛭子屋」は南部藩での御用染師を務め、南部発祥の甲斐国の巨摩郡南部郷（現山梨県南部町）以来、最も古い歴史を持った型染師と伝えられている。この伝統を汲む南部型を「南部古代型」と名付け、今に受け継がれている。

その約500年の歴史を受け継ぎ、十七代目の小野信太郎氏が当主を務める「蛭子屋 小野染彩所」に今回お邪魔し、視察、取材をさせていただいた。

南部型は、文様がダイナミックであり、繊細かつ優雅な流れの表現が特徴である。これらの意匠は、南部藩士の豪快な気性と、美的センスある城主の気質が反映された文様の型紙が彫られていた。染料は現在合成染料も使用しているが、旧南部藩の現秋田県鹿角市では植物染料の茜、紫根、そして南部藍も栽培され、これらを使った三色が特徴である。特に藍は、もともと南方系の暖かいところで育つ植物であるため、寒冷地でも育つように品種改良、栽培方法などの技術的工夫が不可欠であった。

現在でも小野染彩所の作業場には藍瓶があり、藍は徳島のすくも<sup>8</sup>を使っているが、昔ながらの自然発酵建て<sup>9</sup>により藍を建て、使用している。



藍瓶



小野染彩所作業場



南部古代型紙



反物ディテール

「亀甲織」岩手

亀甲織は、藩政時代南部藩に献上され、上流武士の「汗はじき<sup>10</sup>」として使用し、明治、大正時代にも着用されてきた。戦後に一度減じた亀甲織が、この地で復興できた大きな理由は、雫石地方は大麻の栽培地であり、昭和の始めごろまでは全国でも有数の麻の産地であったことがある。

減じてしまった理由は、製織に特別な知識と経験を要したために織れる人が少ない上に、戦後に安価な肌着等が流通したことがあげられる。

今回訪ねた「しずくいし麻の会」は、亀甲織を昭和40年代に、雫石町の加藤ミツエさんが復元に取り組み、その成果をもって昭和60年に加藤さんが雫石町農業大学講座で「亀甲織講座」を開いた。この受講者の強い要望により「亀甲織研究会」が結成され、昭和63年に現在の「しずくいし麻の会」が発足することとなり、技術習得と制作が続けられている。

「しずくいし麻の会」会長の上野節子さんにお話しを伺うことができたが、一番の苦労は大麻の栽培から糸を績むまでの作業とのことで、麻の栽培から製織までの気の遠くなるような工程を、主婦でもある会員さん達が、家事の合間を縫って行っていることに頭のさがる思いである。

亀甲織の特色は名の通り、もじり織りにより六角形の模様を作っていくことである。そして、もじり織による亀甲形の穴が、通気性に優れた機能となっていることも特色である。



汗はじき (明治31年、加藤キワ作)



現在の亀甲織 (ディテール)



しずくいし麻の会 工房



亀甲織 様々な商品

### 「ホームспан」岩手

明治初期に官服用の毛織物の需要が非常に多く、農村における牧羊振興策も行われ、毛織物産業の他に農村工芸としての毛織物「(株)ホームспан」が作られることとなる。明治10年代に二戸郡福岡村に在住していたイギリス人宣教師が、地元民に製織法を伝えたのが岩手のホームспанの始まりといわれる。

大正時代に入ってから、民芸運動を機にホームспанの振興が進むこととなる。第二次世界大戦に入ってから「国産羊毛の購買制限令」が出され、自由にホームспанを生産することができなくなった。戦後、本格的にホームспанの生産が開始されたのは、昭和30年を過ぎた頃、現在の「(株)日本ホームспан」からだ。

今回はこの「(株)日本ホームспан」をはじめ、岩手ホームспанの父と呼ばれる故及川全三氏に学んだ福田ハレを母に持つ故蟻川紘直氏の「蟻川工房」、同じく福田ハレの指導のもと、盛岡婦人共同作業所として発足した「みちのくあかね会」、また同じく故及川全三氏に草木染めの指導を受けた中村行雄氏が二代目で、現在の三代目中村博行さんが代表である「中村工房」を訪ねた。

「(株)日本ホームспан」は、唯一ホームспанを量産している企業で、ホームспанの国内シェア八割を占める企業である。かつての「岩手ホームспан」の中心地、花巻市東和町で操業し続けている。織機のほとんどがシャトル力織機であるが、手紡ぎ、手織りも並行して行われている。羊毛に絹や綿などを混ぜたり、緯糸にテープヤーンを織り込むなど、日々新しいホームспанの開発を行っている。年間生産量は約27,000mで、有名海外ブランドも買い付けにくる。海外での知名度も高い。

社長の息子の菊池久範さんが、工場見学に同行してくださり、社長の菊池完之さんが会社説明をしてくださった。

「蟻川工房」では、故蟻川紘直氏の妻、蟻川喜久子さんが、工房や作品、サンプルの説明をしてくださった。現在は、弟子の伊藤聖子さんが工房主として制作を担っている。非常にセンスの良い、オーソドッ

クスでありながら華のあるホームспанを制作している。一線を退き伊藤さんに任せた今であるが、蟻川喜久子さんの個性と感性は伊藤さんにしっかりと引き継がれている。

「みちのくあかね会」は現在でも全て女性だけで運営されている。こちらの工房の「ネクタイ」を見せて頂いたが、ホームспанの技術である一本織りで織られており、織り幅を少しずつ変えながら、しめやすい形に仕上げる技術はすばらしい。

最後に「中村工房」は、家族5人で工房を運営、代表の博行さんの多趣味で研究熱心、そして前向きな姿勢がそのまま製品になっている。とても楽しい製品達と出会うことができた。



日本ホームспан 製品



日本ホームспан シャトル力織機



蟻川工房 中央蟻川喜久子さん



一本織りによるネクタイ (みちのくあかね会)



蟻川工房 伊藤聖子さん



中村工房 ホームスパン製品



みちのくあかね会 工房



ショールームにて、中村博行さん (写真向って右)

#### 4. 故田中忠三郎氏について

東北における布の調査において、ここで触れるべき偉人がある。故田中忠三郎氏<sup>11</sup>である。

私が東北の布に魅せられたものとして、「津軽こぎん」との出会いがあるが、田中氏はこの「こぎん刺し」の一大コレクターであり、東北の民族学者である。私がこの東北の布の調査、研究を行うにあたり、是非お会いしたい方であった。2012年夏、お会いする約束をしていたが、「体調が優れず残念だが会ってお話できる状態にない」ということで、大変心配をしていたが、次の年の3月5日に他界された。昨年の夏に田中氏のご自宅を訪ね、ご仏前にて焼香させていただいたが、残念でならない。そのおり、田中氏の取蔵庫を見せていただいたが、おびただしい数の民具であり、約三万点にも及ぶ壮大なコレクションに大変驚いた。その田中忠三郎コレクションの中でも他の追隨を許さないコレクションが、「東北の古布」のコレクションである。

「東北の古布」のコレクションのうち、津軽・南部地方の刺し子着786点が国の重要有形民俗文化財に、紡績用具と麻布520点が青森県の有形民俗文化財に指定されている。

ここに、田中忠三郎コレクションの何点かを掲載するが、心揺さぶられる「東北の古布」のコレクションである。



故田中忠三郎氏倉庫（地機）



国指定有形民俗文化財（津軽こぎん）



上記写真ディテール



国指定有形民俗文化財（南部菱刺し たっつけ）



青森県指定有形民俗文化財 (つぎはぎ ドンジャ<sup>12)</sup>)



青森県指定有形民俗文化財(津軽こぎん アバこぎん)



青森県指定有形民俗文化財 (南部菱刺し 前だれ)

## 5. まとめ

2014年度の調査報告であったが、計画のまだ60%程しか調査は終わっていない。今の段階では「東北の布」を通じて多くを語ることはできないが、先進国の日本において、このような仕事が残っていることは奇跡である。

青森県津軽地方のことわざに「泣いてあやぐる(取り合う)形見分け」ということが残されている。肉親が亡くなると、親類、縁者が泣きながら故人の衣類を奪い合うということである。これは繊維素材の乏しい東北の地であるが故であった。現在では考えられないが、かつて女性達が一握りの糸、一枚の端切れがいかにか大切にしていたかを聞くと、東北のモノに対する執着や怨念まで感じられる。

故田中忠三郎氏の著書に「物には、心がある。」というタイトルの書がある。まさに東北の布達には「作り手の心」を感じるのである。

これからの時代、東北の仕事や品々に触発された人々が、新しい意味を感じ取り、新しい価値観を生み、東北の物づくりの精神を未来へと伝えてくれることを願い、今後も調査にあたりたい。

## 付記

今回の実施調査および本論文は、平成26年度金沢美術工芸大学奨励研究の成果の一部である。

## 註

- 1 本事業は、本学が金沢市と共同で、2009年度から市制施行120周年事業として、石川県をはじめ全国に息づく工芸を中心としたものづくりの伝統と継承と産業の振興に資することをめざして実施しているものである。これまでに工芸や芸術学を専門とする教員等からなる調査集収チームが全国の産地を訪ね、これまで金工、染織、漆工の分野で工程見本、技法見本、製品見本、道具や材料を集収してきた。
- 2 布を重ねて一面に刺し縫いしたもの。裂を上下に重ねて針を上から下へと通して繋いだもの。
- 3 アバとは婆さんの意であり、津軽では年を重ねると娘や嫁

に遠慮して、若さの象徴である白糸の模様を藍で染めたこぎん。着古されて白糸が汚れて来ると再び全体を染めたもの。「染めこぎん」とも言う。

- 4 股引。保温、補強、装飾をしているのは全国的にも類をみなく、岩手南部地方だけである。
- 5 八戸に2011年2月にオープンした施設で、地域資源を活かした事業を行い、人が集いコミュニケーションの場、地域文化に触れられる場を提供し、まちを元気にする活動をサポートしている。事業は4つ展開しており、中心市街地賑わい創出事業、文化芸術振興事業、ものづくり振事業、観光振興・フィールドミュージアム推進事業である。
- 6 もともとは麻を裂き、糸として紡ぎ織り上げたものを言い、裂織を示す。
- 7 手織機の一つで、居座機ともいい、原始的な構造で、地面に平行に経糸を張った機。経糸の一端が織手の腰に回した腰当てに接続されているため、経糸の張り具合を調整できるといふ利点があり、慣れると緯糸の織り込みをかたくまで打ち込め、独特の地合の織物を織ることができる。しかし、使いこなすには熟練が必要である。
- 8 藍の葉を十分に発酵させて作った黒褐色で土塊状になっている植物染料、保存がきく。漢字は薬と書く。
- 9 別名地獄建てとも言い、麩や貝灰、石灰、木灰など自然素材の助剤だけで藍を建て、染色可能な状態にする。
- 10 下着であり、汗を吸収し、通気性が良く、武士が愛用していた。汗をはじくところからきている。
- 11 青森県下北郡川内町生まれ。民俗学者・民俗民具研究者・著述家。二十代の頃より、下北アイヌの調査や縄文遺跡の発掘を行う。その後、民族学の分野まで調査対象を広げ、江戸～昭和に至る衣服や民具の集取・保存を行う。寺山修司、黒澤明監督などの映画の衣装を提供。日本民具学会理事、国立民族学博物館国内調査委員、青森ねぶた祭奨励委員会、財団法人稽古館館長などを歴任。1983年に、紺綬褒章受賞。2009年、アミューズミュージアム名誉館長に就任。2013年3月5日、79歳没。
- 12 古手木綿布を幾重にも継ぎ足し、縫い合わせている仕事着や夜着。

## 参考文献

『図解染織技術事典』監修：柚木沙弥郎、著：田中清香、土肥悦子、理工学社、1990年

『新装版 染織事典』編者：中江克己、泰流社、1993年

『津軽こぎんと刺し子 はたらき着は美しい』発行：INAX出版、1998年

『伝承を紡ぐ〈亀甲織〉』発行：雫石町、2005年

『布の記憶 江戸から昭和-受け継がれる用美』著：森田直、(株)青幻舎、2011年

『裂織の本』著：八田尚子、(株)晶文社、2000年

『みちのくの古布の世界』著：田中忠三郎、河出書房新社、2009年

『重要有形民俗文化財 田中忠三郎着物コレクション 津軽・南部のさしこ着物』編集・発行：青森県立郷土館、2012年

『基礎知識、基本と応用技法、モドコの図案を収録した決定版 津軽こぎん刺し 技法と図案集』監修：弘前こぎん研究所、(株)誠文堂新光社、2012年

『企画展 裂織 -サグリとコタツがけ-』監修：飯田美苗、青森市歴史民俗展示館「稽古館」、2003年

(おおたか・とおる 工芸科/染織)  
(2015年10月30日 受理)